



タイトル **気候で読み解く日本の歴史**  
異常気象との攻防 1400 年

著 者 田家 康 (たんげ やすし)

出 版 社 日本経済新聞出版社

発 売 日 2013 年 7 月 22 日

ページ数 305 ページ

本書は、著者の「**気候文明史**」(2010、日経新聞)と「**世界史を変えた異常気象**」(2011年、日経新聞)に続く三冊目の著書である。

「気候文明史」では、気候変動と歴史の関係について転換点を中心に通史としてまとめているが、本書では、サブタイトル「異常気象との攻防 1400 年」と題して、気候変動に起因する災害等への各時代の人々が行った対応策に力点を置いて、古代から昭和に至るまで通史的に描いている。

目次を見てみよう。

プロローグ 太陽活動と火山噴火がもたらす気候変動

第 I 章 平城京の光と影

- (1) 万葉の花さく陰で
- (2) 「祈祷」「税の軽減」「救済米」
- (3) 日本最初の天然痘の流行

第 II 章 異常気象に立ち向かった鎌倉幕府

- (1) 干ばつは平安時代初期も続いた
- (2) 「明月記」が描いた寛喜の飢饉
- (3) 非常時の人身売買を容認した北条泰時

第 III 章 「1300 年イベント」という転換期

- (1) 日蓮が記録した天変地異と飢饉
- (2) 寒冷化が可能にした新田義貞の鎌倉攻め
- (3) 農業技術の発展で気候変動に立ち向かう

#### 第Ⅳ章 戦場で「出稼ぎ」した足軽たち

- (1) 経済発展と人口増加の時代
- (2) 太陽活動の低下が招いた「小氷期」
- (3) 火山噴火が多発した 40 年間
- (4) 北条、上杉、武田 —— 気候が戦国大名を動かした

#### 第Ⅴ章 江戸幕府の窮民政策とその限界

- (1) 戦争は終わった：江戸幕府の天下泰平
- (2) 三代将軍家光、飢饉対策に乗り出す
- (3) シャクシャインが導いた先住民の一斉蜂起
- (4) 元禄の飢饉と綱吉の失政
- (5) 幕藩体制を揺るがした天明の飢饉
- (6) 江戸幕府を追い詰めた 2 度の天候不順

#### エピローグ

- (2) 明治凶作群と昭和凶作群
- (3) おわりに

#### 参考文献

奈良時代は干ばつとともに、天然痘が大流行する。被害は庶民のみならず、宮廷人にも及ぶ。被害を拡大した背景には、万葉の人々による自然破壊があったという。

宮廷や巨大寺院などの木材として森林伐採が進み、森林の大火災が多くなり、伐採後の森林再生は一層困難になった。針葉樹や広葉樹が混在する豊かな自然林が伐採されると、その後に広葉樹を中心とした灌木の森林に生まれ変わる。この低木の森林資源、ナラ、クヌギ、クリなどを炭などに利用しこれを消費してしまうと、表土が失われ栄養度が低い土壌になってしまう。この時、本来の極相とは異なるアカマツが侵入してくる。

奈良時代以降の畿内には禿山が多くなり、そこにアカマツ林が茂るようになった。当時の奈良や京都の古刹などが大規模な自然破壊を招いたとは想像もしなかった。しかし、その結果、アカマツにだけ寄生する<sup>まつたけ</sup>松茸が増えたというエピソードは面白い。

平安時代から鎌倉時代にかけては、異常気象に際して京都の朝廷と鎌倉の幕府での対照的な姿が浮かび上がる。この時代に鎌倉幕府の執権北条泰時は「寛喜の飢饉」は全国規模で、朝廷や寺社は読経を行うくらいしか能がなかった時代に、泰時は、すぐに出挙米を出し、貸し渋り政策などを全国規模で行っている。

ここでは、寛喜の飢饉（1230年 高校時代の記憶によれば、御成敗式目の制定の頃）の様子が記されているが、まさに地獄の様相だ。明月記や吾妻鏡などによれば、「今年、世の中は飢饉で百姓の多くが餓死」、「春から飢饉となり、夏に死者が道を埋め尽くしており、養和の飢饉以来のことだ」、「京中の道路、死骸さらに止まず。北西の小路、連日加増

す」、・・・・・・・・。

著者は、御成敗式目の制定の眼目はそうした状況を踏まえた飢饉対策にあったとしている。つまり、飢饉の最中に、各地の地頭の過酷な年貢収奪や不正行為を抑えるための式目が制定されたのだと論じる。さらに、本来禁じられていた人身売買も、飢饉という非常時であることを鑑み、超法規的に認めている。それによって、多くの窮民が命を保つことが出来たという。

著者は、「北条泰時は、事にあたって迅速で、決断力を持った優れた政治家だった」と強調する。

飛鳥時代、奈良時代に始まり平安時代を通して続いた温暖な時代が終わり、小氷期という寒冷な時代に向かう転換期の「1300年イベント」を取り上げている。

「1300年イベント」とは、1250年から1350年にかけての100年間を温暖期から寒冷期への移行期を捉え、サウス・パシフィック大学海洋地球学部教授のP. ナンが名づけたものである。

この時期地球は著しい気温低下に見舞われ、とくに厳しい寒波に襲われたイングランドの異常気象は、イングランドのベネディクト会修道士 M. パリスで、その年代記「クロニカ・マジョラ」に、1256年以降の天候の悪化とそれに伴う飢饉と疫病を記録している。

M. パリスと並び、この時代の天変地異と飢饉を記した宗教家がアジアの東端にいた。日蓮である。日蓮は1260年（文応元）の7月16日、鎌倉幕府の五代執権の北条時頼に宛てた「立正安国論」の冒頭で、飢饉の惨状を綴っている。「近年から近日にかけて、天変地異が続出し、飢饉が発生し、疫病が流行した。災難が日本全土に広がり、牛馬もいたる所で死に骸骨は路上に捨てられて、すでに大半の人びとが死に絶えて、悲しまない者は1人もいない」

この時期、寒冷な時代に備えるかのように、農業技術の革新がこの時代に広がり農業技術の発展、すなわち、鉄製農具の普及、農耕家畜の利用と肥料の多様化、灌漑設備と水利管理の工場、新しい稲の品種の採用、水田の二毛作などで気候変動に立ち向かった様子が詳細に記されている。

室町時代も小氷河期での天候不順の時代を中心に描いている。飢饉の最中であって、農民の中には生き残るために足軽に変わっていくものもいた。

江戸時代でも小氷期の寒冷な時代を扱う。火山変化が多発し、6回もの深刻な飢饉が発生した。家光や吉宗のように強い指導力を発揮し、危機に対処した将軍もいた。

これからやって来る気候変動が人為的要因による温暖化なのか、マウンダー極小期の再来といった太陽活動の低迷や突発的な火山噴火による寒冷化なのか、意見が分かれるところである。

とはいえ、気候変動に対する処し方を考える時、我々の先祖が万葉の時代から格闘し、明治時代以降も踏襲してきた方向は基本的には何ら変わらないだろう。

気候変動の影響を補うものとして日記などの古記録を丹念に精査し、当時の古気候の状態を復元し、歴史との相対関係をうまく論じているところは興味深い。

たとえば、桜の満開日による気温推定である。春に花を咲かせる樹木は、前年の夏に花芽作りを開始する。秋から冬にかけて気温が低下すると花芽は休眠に入り、低温がある程度休眠打破によって再び花芽の生成が始まり、春になって開花に至る。

桜は通常、年を越して休眠打破した後に花芽の成長を再開し、気温の上昇に合わせて花芽が大きくなっていく。桜の開花時期が早いか遅いかについては、開花直前の春先の気温に依存するところが大きい。このことから、古文書に記載された桜の満開日の違いを比較することで、各年の3月の平均気温を推定出来るのではないかという研究がある。

平安時代に宮廷人が鑑賞したヤマザクラは満開日（満開となるのは2~4日と短い）を時系列に並べることが出来る。こうした生物学的なアプローチによる古気候研究は現在でも行われている。……。

本書の飢饉の様子を読み解くと、古代から近世まで、農業生産力こそが国力であり、「食糧事情が人口を決めていた時代」は飢饉が無くなる昭和の時代まで続いている様子が見取れる。

日本列島の過去の人口を考える場合、全国的な戸籍調査は1721年（享保6年）に徳川吉宗が発した「子午改め」以降である。18世紀以前となると直接の人口統計はなく、仮定を置いた推計を行うしかない。たとえば、縄文時代の人口については、遺跡数を集計した上で、各遺跡の平均人口を時代ごとに仮定して推定するという。ある研究によれば、縄文時代早期の8100年前は2万100人、前期の5200年前は10万5500人、……というように推定されるという。この種の推定は、国立民族学博物館、京都大学などが行っており、中には、ハワイ大学歴史学部の推計も見られる。推計が可なりラフでその信憑性も怪しい部分もあるが、研究が進めばさらに詳しい推計が出てくるかも知れない。

『“日ひの下もとに新しきものなし”とは、旧約聖書の「伝道の書 1章9節」からの言葉である。すなわち、「長い人類の歴史を辿ってみれば必ず先例がある」という意味である。気候変動にせよ自然災害にせよ、これらに対するあり方という面では、我々の先祖が行ってきた方向と大きく異なることはないだろう。我々は、先人同様に科学技術の発展をたゆまず続け、さらに為政者に対しても、安定した政治体制の下で、過去に囚われない実効性のある対策を期待したい』という言葉で本書を閉じている。

高校時代に習った退屈だった日本史の背景に、歴史を左右するこのような想像を絶する

気候変動が絡んでいたとは想像すら出来なかった。御成敗式目の成り立ちの背景をちょっと知っているだけでも、退屈だった日本史ももっと面白く学べたはずだ。

本書は、気候決定論に傾きすぎるという批判もあるが、巨視的な気象史と歴史のエピソードを上手く結びつけ新しい角度から日本史を論じている。楽しく日本史を学ぶには、昨今のように、多くの人々が気象異変に目を向け始めた時に、日本史の解釈に気候変動の影響を取り入れた本書は、きっと世の注目を喚起するはずである。

2014. 11. 27